



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

（第一五九号）

大暑たいしょ

七月二三日

御白石

間もなく御白石持行事が始まります。

伊勢の人々にとっては、まさしく遷宮の年に行われるとあって、格別の思いがある行事。私も二〇年前、五十鈴川を川曳し、ふだんは入れない内宮の瑞垣みずがき内に新宮を拜し、御白石を納めたことは今もよく覚えています。

その御白石は宮川の川原で拾い、選別したあと、また宮川の水できれいに洗い、保管しておきますが、内宮前の宇治奉献団は近くの五十鈴川の水で洗い清めました。宇治はかつての内宮領ですから、やはり内宮神域を流れる五十鈴川にこだわりがあるのでしょう。

御白石を敷くのは、瑞垣みずがき内に草が生えたり、土砂が雨水で流れたりするため、鎌倉後期に砂や石を敷いたのが始まりといわれています。内宮ならば近くの五十鈴川の石を使わなかったのかというと、五十鈴川から採った砂礫さだを敷いたという説と、内宮領も宮川から白石を採集していたという説があり、わからないのが現状です。

伊勢市楠部町の四郷地区コミュニティセンターで開かれている「四郷地区のお白石持」展へ行ってみると、江戸末期の嘉永二（一八四九）年の第五四回の奉献の通達をはじめ、明治、大正、昭和の書類が展示されていました。江戸時代のいつかは不明ですが、心御柱奉建しんのみはしらほうけんのために白砂を運ぶ要請の記録もあり、当時は遷宮前だけでなく、なにか不具合があると砂や石を運んだようです。

終戦後、四年遅れで行われた昭和二八年の第五九回の様子もわかりました。内宮への御白石の奉献は八月二六日から九月二日。宇治二〇樽、三〇〇〇人、楠部六樽、朝熊、鹿海は四樽：奉献した樽数と人数が記された一覧表がありました。淡々と数が書かれているだけですが、このときに運んだ御白石は人々にとって戦後の復興の証でもあったことでしょう。

文 千種清美

